

## 幼小交流活動は幼児にとってどのような体験であるか —交流前後のインタビューの分析から—

濱田 祥子<sup>1</sup>

What experience is exchange activity between preschool and primary school for preschool children?  
—From the analysis of the interview before and after the exchange—

Shoko Hamada<sup>1</sup>

**Abstract :** There is an exchange activity between preschool and primary school as one of the approaches of preschool and primary school cooperation. The research that searches for an exchange activity from preschool children's aspect is a little. Therefore, this investigation aimed to search what experience exchange activity between preschool and primary school was for preschool children. The interview was executed to preschool children before and after the exchange activity. As a result, it was shown that the exchange activity was a happy experience for preschool children. However, the child who was holding the tension and uneasiness before the exchange activity. Moreover, preschool children got a stronger impact shown from the content of the exchange activity receiving from the grade-schooler. In addition, it was shown that the yearning to the grade-schooler became clearer through the exchange activity.

**Key Words :** exchange activity between preschool and primary school, yearning target, interview to preschool children

### 目 的

幼小連携は、幼稚園と小学校でのギャップを埋め、幼稚園での遊びを中心とした教育から小学校での教科指導による教育への移行を円滑にするというねらいの下で進められてきた。また、小学校1年生における、授業不成立を始めとした、学級機能が不全となっている状態である「小一プロブレム」への対応としても、幼小連携の活動は盛んになった。近年では、そこへ保育所も加わった幼保小連携の取り組みも展開されている。その取り組みは、情報交換や交流活動、カリキュラム開発等多岐にわたる(上野, 2007)。中でも、交流活動が盛んに試みられるようになっており、今後もさらに発展させていきたいという現場の声も挙がっている(庄司・野田, 2009)。この背景には、異校種異年齢での交流活動を通して、人間関係が希薄になっている現代の子どもたちに人とのかかわりについ

て学ばせたいという思いがある。このような思いに基づき、各幼稚園・小学校は指導計画作成の研究を進め、実践に取り組んできた。交流活動の実現に至るまでには様々な課題があり、多くの労力を要する。時間調整や教員間の連絡・打ち合わせといった時間的課題が主である。それでも交流活動を取り入れたいと思うのは、教師がその成果を感じているからであろう。ここでの成果とは、子どもたちが交流活動を通して感じたことを、その後の生活へとつなげていくことと考える。

しかしながら、実際に子どもたちが交流活動で体験をしたことをどのように感じ、受け止めたのかということについての研究は多いとはいえない。小学生については、学内の活動として反省会を設けることや、感想を作文にすることで教師はフィードバックを得ている。また、行動観察による研究(林, 2007)もある。とりわけ、幼児側の視点からの交流活動の意味について問うた研究が少ないのである。その理由として、言語的能力や日々のカリキュラム等の問題

1 東京都武蔵野市  
(現 関東短期大学)

が挙げられよう。

本調査を実施した広島県東広島市立A幼稚園も上記の問題を抱えていた。これまでの幼小交流活動において、交流対象である広島県東広島市立B小学校の小学生は、交流活動の体験を作文にしている。そこには、一人ひとりの小学生の交流活動における学びや幼児への思いが書かれており、小学生がどのように交流活動を受け止めたかをうかがい知ることができる。一方、幼稚園において、幼児一人ひとりに感想を文章化させ、記録に残すことは困難である。個々に感想を聞けばよいのかもしれないが、毎日のカリキュラムにおいてそのような時間を割くことは現実的には困難である。当然ながら、全体の雰囲気や幼児からの自発的な語りによって、幼児にとっての交流活動の体験を捉えることはしてきている。しかしながら、保育者は幼児が交流活動をどのように受け止めたかをもっと知りたいという思いを抱いていた。ただなんとなく楽しかった、嬉しかったというだけの体験で終わっているのではないかという不安も抱えていた。

調査実施年度、A幼稚園は幼児教育調査研究事業（文部科学省委託事業）の調査研究実施地域に指定されており、幼保小連携に関する研究に取り組んでいた。その中の交流活動の取り組みにおいて、「交流活動などを通して、子どもとかかわる身近な人をモデルとし「思いやり」「責任感」などの社会性をはぐくむ」という計画を立てていた。この計画がどの程度達成されたかということについて知るためにも、幼児へのインタビューは有効であろう。

したがって、本調査はこの計画を踏まえ、幼児にとって小学生との交流活動がどのような体験であるかということについて、交流活動前後のインタビューを通して探ることを目的とした。具体的には、幼児が小学生との交流を通して、小学生の姿をどのように捉え、また小学生と比較して自己をどのように捉えたのかを検討する。また、小学生は幼児のモデル対象となったのかという点についても検討する。

なお、本調査は平成X年11月に実施された幼児教育調査研究事業に含まれる幼保小交流活動と、それ以前の平成X年6月に実施された幼小交流活動の2回の交流活動においてインタビューを実施した。本調査は幼児と小学生という異年齢での交流に焦点を当てたため、幼稚園児と保育園児という同年齢での交流についてのイン

タビューは分析から除外した。

## 方法

幼小交流活動が幼児にとってどのような体験であるかを探るために、幼小交流活動の前後においてインタビューを実施した。インタビューは幼稚園の1室にて、調査者と幼児1名で実施した。所要時間は1名につき、10分程度であった。

### (1) 交流活動前

交流活動前は4つの質問項目を設けた。

**前感情** 交流活動への心持ちを探るために、楽しみにしているかどうかを尋ねた。この際に、感情を段階的に評定するために、5段階の感情を表す顔カードを用意した。顔カードが表す5段階の感情は「とても楽しみ」「楽しみ」「普通」「嫌だ」「とても嫌だ」とした。調査者は、顔カードが表す感情を声に出しながら1枚ずつ幼児の前に提示し、机に並べた。その後、該当する感情を表す顔カードを選んでもらった。

**前認識・前比較** 交流活動を通して小学生に対する知識や思いがどのように変化するかを調べるために、小学生について知っていること（前認識）や自分との違い（前比較）について尋ねた。

**前選択** 現在の自分（幼児）と小学生になることとどちらがよいか選択させた。その後、選択理由についても尋ねた。この質問は、Zazzo（1969/1974）の『発達の力動過程検査』を参考に設けた項目である。『発達の力動過程検査』とは、いくつかの年齢のうち、自分が一番なりたい時期（選択）、なりたい時期（受容）、なりたくない時期（拒否）を問い、さらにそれらの理由づけをさせることにより過去や未来の自己への意味づけの様相を探ったものである。選択するためには、それぞれの選択肢についての自分なりの知識やイメージが必要となる。幼児に現在の自分（幼児）と小学生のどちらかを選択させることにより、幼児が自分や小学生についてどのような認識を持ち、それらに対してどのような価値を抱いているかを探ることができると考えた。

### (2) 交流活動後

交流活動後は、7つの質問項目を設けた。

**後感情・印象** 交流活動が楽しかったかどうかを尋ねた（後感情）。この際も、交流活動前と同様に顔カードを用いて5段階の中から選んでもらった。使用した顔カード、手順は交流活

動前と同じであった。ただし、調査者が感情を声に出す際は「とても楽しみ」を「とても楽しかった」等、全て過去形の言い回しを用いた。幼児が選択したら、そのような感情を抱いた体験内容を探るための質問をした（印象）。ここでは、幼児が選択した感情によって聞き方を変えた。「とても楽しかった」「楽しかった」を選択した場合は何が一番楽しかったか、「とても嫌だった」「嫌だった」を選択した場合は何が一番嫌だったかを尋ねた。「普通」を選択した場合には、なぜ普通と思ったのかを尋ねた。後認識・後比較 交流活動を通して小学生に対する知識や思いがどのように変化したかを調べるために、小学生について新しく知ったこと（後認識）や自分との違い（後比較）について尋ねた。

**憧れ対象** 幼児が小学生の中に憧れ対象を見つけたかどうかを探るための質問をした。憧れ対象がいた場合は、どのような部分に憧れを抱いたのかを尋ねた。

**後選択** 現在の自分（幼児）と小学生になることとどちらがよいか選択させた。その後、選択理由についても尋ねた。

**モデル行動** 第2回の交流活動においてのみ、小学生にしてもらったことで、自分も年下の子にしてあげたいと思うことがあったかを尋ねた。

### (3) 交流活動前後の質問項目

以下に、交流活動前後の質問項目を示す。

#### 交流活動前

- 小学生と遊ぶのは楽しみ？（前感情）／5段階評価
- 小学生はどんな人たちかな？小学生のことで知っていること教えてくれる？（前認識）
- 小学生と〇〇くん（ちゃん）はどんなところが違う？（前比較）
- 今の〇〇くん（ちゃん）と早く小学生になるの、どっちがいい？（前選択）

#### 交流活動後

- 小学生と遊んだのは楽しかったかな？（後感情）／5段階評価
- 何が一番楽しかった（嫌だった）？（印象）
- 小学生はどんな人たちかな？（後認識）
- 小学生と〇〇くん（ちゃん）はどんなところが違っていた？（後比較）
- 今の〇〇くん（ちゃん）と早く小学生になるの、どっちがいい？（後選択）

- 小学生の中に「僕（私）もこんな小学生になりたいなあ」という素敵な人はいた？どんなところが素敵だった？（憧れ対象）
- 小学生にしてもらったことで、〇〇くん（ちゃん）がきりん組（年中児）のお友達にしてあげたいことはあった？どんなことをしてあげたい？（モデル行動）

※7.の項目は第2回の交流活動でのみ設けた。

## 結果と考察

### (1) 第1回

**日時** 平成X年6月3日9:30～11:00

**場所** 東広島市立B小学校 体育館他

**対象児** 交流活動に参加したのは、A幼稚園年長児（70名）・B小学校1年生（45名）であった。このうち、インタビューを実施したのは幼児のみで、男児13名、女児16名の計29名である。

**調査時期** 活動前は5月26日～6月3日の間5日間、活動後は6月3日～6月6日の4日間で調査を実施した。朝の登園後の自由時間、お昼休みの時間を使用して実施した。

**活動内容** 始めに小学生と幼児の約10名のグループを作り、輪になって自己紹介をし、幼児は小学生からグループの名札をつけてもらう。その後、各グループは小学生が考えた遊びをして過ごす。遊びの内容は、だるまさんがころんだ、かけっこなどであった。途中で、先生から呼ばれたグループは指令の書かれた紙を受け取る。指令内容は、「自分の椅子に座らせる」「ランドセルを背負わせる」等、幼児が小学校生活に触れるものであった。指令を終えたら、写真撮影をして体育館に戻る。最後は全体で貨物列車をしてこの日の交流活動は終了した。

各質問項目について以下にまとめる。

**感情・印象** 交流活動前後のインタビュー結果をTable 1 に示す。交流活動の前後における

Table 1 交流活動前後における幼児の感情（人）

	交流後					計
	a	b	c	d	e	
交流前	a. とても嫌	0	0	0	0	0
	b. 嫌	0	0	1	0	2
	c. 普通	0	0	0	0	6
	d. 楽しみ	0	0	0	1	6
	e. とても楽しみ	0	0	1	1	11
	計	0	0	2	2	25

※交流活動後の評定カテゴリーは過去形で尋ねた。

5の評定カテゴリーの内、「とても嫌だ」「嫌だ」「普通」の3つと「楽しみ」「とても楽しみ」の2を、それぞれ合併し、前後で変化があった人数に関して二項検定を行ったところ、 $p=.039$ で5%水準水準で有意であり、活動後によりポジティブな感情を抱くことが明らかとなった。

また、交流活動前には「普通」「嫌」を選択した幼児が9名いた。これらの幼児は選択の際に、「緊張する」「ドキドキする」と言っていた。この発言から、小学生に対して嫌悪感情を持っているのではなく、普段馴染みのない小学生との交流に対する不安を抱えており、その結果「普通」「嫌」を選択したと考えられる。交流活動後のインタビューでは、「嫌」「とても嫌」を選択した幼児は1名もいなかった。「普通」を選択した幼児2名も、理由は「時間が短かったから」「もっと遊びたかった」というものであった。このことから、交流活動が幼児にとってよい感情体験であったことがうかがえた。

また、印象についてであるが、「普通」を選択した2

名以外の27名に対して、何が一番楽しかったかを尋ねた。その結果、5名が「ランドセルを背負ったこと」「教室に入ったこと」「小学生の椅子に座ったこと」という、小学校生活を体験する内容を挙げていた。残りの22名は「小学生と遊んだこと」「お兄さんにやさしくしてもらったこと」や、具体的な遊びを挙げていた。幼児にとって印象深い体験は、小学校生活を体験するということよりも、小学生とふれあうことであったようだ。

このことから、幼児は幼小交流活動において、物質的体験よりも、人物的体験に対して強い印象を持つことが示唆された。

**認識** 交流活動前の「小学生はどんな人たちかな？小学生のことで知っていること教えてくれる？」という質問に対して「わからない」と答えた幼児は13名であった。交流活動後の「小学生はどんな人たちかな？小学生のことで新しい発見があった？」という質問に対して「わからない」と答えた幼児は3名であった。多くの幼児が交流活動を通して小学生の姿を知り、また、小学生の新しい一面を発見していた。

認識の内容について以下にまとめる。交流活動前のインタビューにおいて回答があったのは29名中16名であった。そのうち10名は「勉強をする」、残りの6名については「大きい」「格好いい」「かわいい」「怖い」「にこにこしている」

Table 2 交流活動前後における幼児の選択（人）

		交流後		
		自己	小学生	計
交流前	自己	4	2	6
	小学生	3	20	23
	計	7	22	29

「すべり台を滑る」であった。このことから、交流活動前に幼児の持っていた小学生に対する認識は、「わからない」という未知の存在、「勉強をする」という一般的小学生像であり、自身の体験に基づくものとは言いがたいと考えられる。

交流活動後のインタビューにて回答があったのは29名中26名であった。回答の内容を見ていくと、「ちゃんとしている」「色々なことを教えてくれる」「色々な友達がいる」「男の子はいたずらばかりする」「声大きい」という、交流活動がなければ知ることのない学生の姿を挙げる幼児がほとんどであった。このことから、漠然と抱いていた小学生のイメージが、より具体的なものとなったことがうかがえた。

**比較** 「小学生と〇〇くん（ちゃん）はどこが違う？」という比較質問に対して「わからない」と答えた幼児は、交流活動前は5名、交流活動後は1名であった。

回答の内容を見ると、交流活動前は10名の幼児が、小学生と自分は「同じ」と答えていたが、交流活動後

に「同じ」と答えた幼児は3名であった。多くの幼児が、交流活動を通して小学生と自分との違いを感じたようである。

**選択・憧れ対象** 交流活動の前後のインタビューにおいて、幼児が現在の自分と小学生になることとどちらがよいと選択したかをTable 2に示す。その結果、交流活動前後において大きな変化はなく、どちらにおいても、多くの幼児が「早く小学生になりたい」と回答していた。小学生を選択した理由は、「勉強がしたい」「楽しそうだから」「大きいから」というものであった。

また、憧れ対象の有無については、23名が憧れ対象がいた、6名がいなかったと答えた。多くの幼児が憧れ対象を見つけており、いずれも同性であった。また、憧れ対象を見つけた全ての幼児が、憧れ対象として個人氏名を挙げていた。幼児にとって憧れ対象となるのは、同性の特定の人物のようである。どのような部分に憧

れを抱いたかについては、「やさしいところ」「先生の言うことをきちんと聞いていたところ」「前ならえがすごかった」等であった。幼児にとって、自己の将来を自己の時間軸でとらえることは困難である。したがって、周囲の人間をモデルとしてとらえる。小学生に憧れを抱くということは、そこに将来の自分像を重ね合わせていると考えられる。「こんな人になりたい」という思いを抱くことは、自己成長において非常に大切なことであろう。

## (2) 第2回

日時 平成X年11月14日 9:45～11:00

場所 東広島市立A幼稚園 遊戯室他

対象児 交流活動に参加したのは、A幼稚園年長児（70名）・C保育所年長児（43名）・B小学校5年生（45名）であった。このうち、インタビューを実施したのはA幼稚園の男児13名、女児16名の計29名である。この29名は全て、第1回目にインタビューを実施した幼児である。

調査時期 活動前は11月10日～11月14日の間4日間、活動後は11月14日～11月19日の4日間で調査を実施した。朝の登園後の自由時間、お昼休みの時間を使用して実施した。

概要 幼稚園・保育所の年長児5～6名と小学5年生1名によるグループを編成した。残りの5年生はコーナー遊びを提供した。コーナー遊びには、絵本・トランプ・射的・輪投げ等があり、5年生による手作りの教材が用意されていた。これらのコーナー遊びを、グループで回った。

各質問項目について以下にまとめる。

感情・印象 交流活動前後のインタビュー結果をTable 3 に示す。交流活動の前後における5の評定カテゴリーの内、「とても嫌だ」「嫌

Table 3 交流活動前後における幼児の感情（人）

	交流後					計
	a	b	c	d	e	
a.とても嫌	0	0	0	0	0	0
b.嫌	0	0	0	0	0	0
c.普通	0	0	0	4	2	6
d.楽しみ	0	0	0	4	4	8
e.とても楽しみ	0	0	0	3	12	15
計	0	0	0	11	18	29

※交流活動後の評定カテゴリーは過去形で尋ねた。

だ」「普通」の3つと「楽しみ」「とても楽しみ」の2を、それぞれ合併し、前後で変化があった人数に関して二項検定を行ったところ、 $p = .031$ で5%水準水準で有意であり、活動後によりポジティブな感情を抱くことが明らかとなった。

また、交流活動前には「普通」を選択した幼児が6名いた。第1回の交流活動と比較すると「嫌」を選択した幼児はおらず、緊張や不安を感じている発言はなかった。

これは、交流活動にむけて、幼稚園内で事前活動がなされたためであると考えられる。事前活動は、交流活動の1ヵ月前から全8時間の保育計画の下で実施された（Table 4）。内容は、担任の教師を通じて小学生に幼稚園の生活や様子を伝えてもらったり、また、小学校の教師が幼稚園を訪問し、小学生の学校での様子を聞いたりするというお互いの普段の様子の情報交換から始まった。その後、小学生の生活や授業の様子をビデオで観て知るという機会を設け、小学生への親しみやすさや小学生を迎える気持ちを膨らませるよう配慮した。また、交流活動の日までのカウントダウンカレンダーを作成し、意識付けていくようにした。さらに、幼稚園に来て楽しくなる、来てよかったと思ってもらえるようにするためには、自分たちにはどんなことができるのかを幼児と教師とで一緒に考えた。そして、来園者が幼稚園の門から遊戯室まで戸惑わず、楽しく行くために「ようこそ道」を作成した（Figure 1）。「ようこそ道」はダンボール箱に様々な道具を使って色を付けて作成された。当日は「ようこそ道」で門から遊戯室までをつなぎ、小学生、そして保育園児らを迎えた。



※幼稚園より、掲載の許可を得ています。

Figure 1 ようこそ道

Table 4 事前活動の保育計画

	9月（第4週）3時間	10月（第1・2週）1時間	10月（第4週）4時間
流れ	<p>小学校5年生に自分たちの好きな遊びや生活の様子を伝えよう。</p> <p>○はじめの会・終わりの会 ○おひさまタイム ○給食当番・給食時間 ○交流会でするダンス「楽しいね」</p>	<p>小学校1年生の先生から生活の流れ・勉強についてなど話を聴こう。</p> <p>↓</p> <p>保育所の友達・小学校5年生を気持ちよくお迎えする「ようこそのみち」を作ろう。</p>	<p>らいおん1組・2組での協同制作をしよう。 ★ようこそのみちを作ろう。</p> <p>↓</p> <p>11月14日に気持ちよくお客さんを迎えよう。</p>

また、交流活動後のインタビューでは、「普通」「嫌」「とても嫌」を選択した幼児は1名もおらず、本交流活動も幼児にとってよい感情体験であったことがうかがえた。

また、印象についてであるが、29名全員に対して何が一番楽しかったかを尋ねた。その結果、9名は「駒がうまくできたこと」「トランプ」等、コーナー遊びについて述べた。残りの20名が「一緒に遊んだこと」「小学生が会いに来てくれたこと」「お姉さんがやさしかったこと」という、小学生とのふれあいについて述べた。やはり、前回と同様に幼児にとって印象深い体験は、小学生とふれあうことのようにであった。

**認識** 交流活動前の「小学生はどんな人たちかな？小学生のことで知っていること教えてくれる？」という質問に対して「わからない」と答えた幼児は4名であった。第1回の交流活動前と比較すると「わからない」と答えた幼児は1/3に減少していた。これは、事前活動において、小学生の生活や授業の様子を知っていたためであると考えられる。また、前回の交流活動体験も少なからず影響していると考えられる。交流活動後の質問において「わからない」と答えた幼児は1名であった。

また、認識の内容について以下にまとめる。交流活動前のインタビューにて回答があったのは25名であった。内容については前回と大きな違いはみられなかった。しかし、そのうち10名は「前に1年生と遊んだ」という発言をしていたことに注目したい。そのうち4名は「次は5年生だからもっと大きいと思う」と述べた。つまり、第1回の交流活動に基づいた小学生に対する認識を持っており、さらに小学生の中でも学年による違いがあるという視点を持っているということが考えられる。

**比較** 「小学生と〇〇くん（ちゃん）はどこが違う？」という比較質問に対して「わからない」と答えた幼児は、交流活動前は

6名、交流活動後は3名であった。どちらも第1回交流活動でのインタビューよりも増えており、その原因は不明である。

回答の内容を見ると、小学生と自分は「同じ」と答えた幼児は、交流活動前3名、交流活動後0名だった。第1回交流活動のインタビューにおいて「同じ」と答えた幼児は、交流活動前は10名、交流活動後は3名であった。このことから、小学1年生よりも、小学5年生に対してより自分との違いを感じたようである。

交流活動後の質問において回答があったのは26名であった。内容を見ていくと、「大きかった」と答えた幼児が15名であった。第1回の1年生との交流活動ではこのような回答は少数で、第2回交流活動において、幼児は自分よりもずっと大きな5年生に圧倒されたことが分かる。

**選択・憧れ対象** 交流活動の前後のインタビューにおいて、幼児が現在の自分と小学生どちらがよいと選択したかをTable 5に示す。その結果、交流活動前後において大きな変化は見られなかった。また、第1回交流活動とも大きな変化はなかった。小学生を選択した理由において、「勉強がしたい」と答えたのは交流活動前9名、交流活動後5名と少し減少した。一方、交流活動前と比較して、交流活動後に多くみられたのは「楽しそうだから」という回答であった。勉強を頑張りたいという目標も大切であるが、小学生になることは楽しそうだという好意的感情を抱くことは就学準備期として大切なことであろう。

また、憧れ対象の有無について、22名が憧れ

Table 5 交流活動前後における幼児の選択（人）

	交流後			
	自己	小学生	計	
交流前	自己	6	1	7
	小学生	1	21	22
	計	7	22	29

対象がいた、7名がいなかったと答えた。多くの幼児が憧れ対象を見つけており、第1回交流活動と同様に、いずれも特定の同性の人物であった。どのような部分に憧れを抱いたかについては、「足が速いところ」「しっかりしているところ」「格好いいところ」等、各々の視点で述べていた。

**モデル行動** この質問項目では、まず、「小学生にしてもらったことで、〇〇くん(ちゃん)がきりん組(年中児)のお友達にしてあげたいことはあった?」と、幼児が小学5年生にしてもらったことで、幼稚園において自分が年下の子たちにしてあげたいと思ったことがあるかを尋ねた。「ある」と答えたのは17名、「ない」と答えたのは12名であった。あると答えた幼児には、具体的にどんなことをしてあげたいのかを聞いた。その結果、「やさしくしてあげる」が8名、「教えてあげる」「遊んであげる」が各3名であった。その他は「かわいがる」「普通にしておく」「格好よくしておく」が各2名であった。半数以上の幼児が小学5年生にしてもらったことで、自身も年下の子にしてあげたいことがあると答えた。このように、幼児は交流活動において年下としてケアされたことを、今度は自分が年下の子にしてあげたいという気持ちを抱くことがわかった。このことは、幼小における異年齢交流がそこだけにとどまらず、幼稚園内での異年齢交流にも少なからず影響をもたらす可能性を示している。

### まとめ

本調査は、幼小連携の取り組みのひとつである幼稚園と小学校の交流活動が幼児にとってどのような体験であるかを探るために実施した。交流活動は、第1回は1年生、第2回は5年生を対象として実施された。それぞれ交流活動前後において、幼児にインタビューをした。

第1回交流活動前のインタビューでは、小学生との交流に対して緊張や不安を抱いている幼児の姿が見られた。第2回交流活動前のインタビューでは、緊張や不安を抱いているという幼児はおらず、むしろ楽しみにしていることが感じ取られた。第2回交流活動前における幼児の姿は、第1回の小学生とのふれあい体験の影響もあると思われる。日頃、小学生とのかかわりが少ない幼児にとって、小学生との交流活動は未知の体験である。そのような幼児は、第1回交流活動前には不安を抱いていたであろう。し

かし、第1回交流活動を通して、小学生が未知の存在ではなくなり、憧れ対象となったのであれば、第2回交流活動前において不安を抱くことはなくなることは想定できる。

しかし、第1回と第2回の交流活動前の幼児の感情の違いはそのためだけではないと思われる。第1回と第2回の大きな違いは、事前活動の有無である。第1回の交流活動では、交流活動について事前に担任教師から話はしたものの、カリキュラムとして事前活動をするとはなかった。一方、第2回の交流活動では、交流活動にむけての事前活動をカリキュラムとして設けた。そして、交流活動にむけて幼児らの気持ちを盛り上げるよう、様々な取り組みを実施した。

このような事前活動は、幼小交流活動の質的發展のために必要であるとされている(住野, 2006)。事前活動によって、交流活動に対する幼児の不安の解消、期待感の向上をもたらす。それは、幼小交流活動において、客体となりやすい幼児に主体性をもたせることへとつながるのである。

また、事前活動だけでなく、事後活動も幼小交流活動の質的發展において必要である。事後活動では、直接的な交流体験を意味づけることで、そこで学んだことを日常生活へ反映できるようにすることが求められる(住野, 2006)。例えば、交流活動の振り返りの際に、今後生かせることを意識化させることが挙げられている。

本調査では、第2回交流活動後のインタビューにおいて、「5年生にしてもらったことで、年中児さんにしてあげたいと思ったこと」を尋ねた。ここでは、年長者にってもらったことを、今度は自分が年少者にしてあげたいという気持ちを意識化させた。その後の幼児らの様子として、学んだことを自分のものとし、未就幼児・年少児へのかかわり方へ生かそうとする姿につながってきたという幼稚園の報告があった。もちろん、事後活動がなくてもこのような姿はみられたのかもしれない。しかし、小学生でも、幼児の世話で精一杯で自己を振り返る余裕はなく、幼小交流活動を通して自ら自己の成長に気がつく者は少数である(庄野・野田, 2009)。そうであれば、幼児が自ら活動を意味づけることはなおさら難しく、ただ楽しかったというだけで終わらせないためには、事後活動による支援は必要不可欠となろう。

また、幼小交流活動の成果を、教師に評価してもらった結果、幼小間で違いがみられた(丹羽・酒井・藤江, 2005)。評価に違いがみられたのは、自己の成長への意識に関するものである。小学校では「異年齢の子どもの姿を見ることで、子ども自身が自己の成長の実感を持った」という項目への評価得点は高い。一方、幼稚園では「異年齢の子どもの姿を見ることで、子ども自身が自己の成長への見通しを持った」という項目への評価得点はあまり高くない。この結果から、幼稚園側は幼児が自己の成長について意識化するのにはまだ十分な活動がなされていないか、あるいは自己の成長を意識化すること自体の意義がまだ感じられていないのかもしれないと考察されている。

しかしながら、本調査を通して、幼児も小学生の姿を見て、自分もあんな風になりたいという、自己の成長の見通しをもっていることがわかった。また、教師らは、幼児が小学生に憧れを抱き、小学生にしてもらったことを自分も年少者にしてあげようという気持ちを持ったことを喜ばしく感じていた。A幼稚園は、第2回目の幼小交流活動についての報告書において、A幼稚園のD児の変容を取り上げている。交流活動前、D児は日頃の生活において友達への冷たい発言が多く観察されていた。教師らは、そのD児が交流活動終了後のお別れの際に、小学生と保育園児にずっと手を振っていた姿を見て、D児が人とつながる感動体験をすることができたからだと考察している。また、交流活動後のクラスの話し合いでは、D児は5年生について「僕もあんなお兄ちゃんになりたい」と発言し、5年生に対する憧れの気持ちを持つことができたことと記述されている。このような具体的な事例からも、教師らが、自身の成長の見通しを持つ幼児の姿を捉え、また、そのことを評価していることがうかがえた。

これらのことから、幼児にとって幼小交流活動は、教師ら周囲の支援によって、自己の成長を意識化する場となることが示唆された。また、そのことによって教師も交流活動の成果を高く評価することへとつながると考えられる。

また、印象に残った体験については、第1回・第2回ともに、小学生とふれあったことについて述べた幼児が多かった。小学校生活に触れることや、見たこともない遊びをすることよりも、幼児にとってインパクトがあるのは小学生という存在そのものであるということだ。こ

のことは、小学生と直接かかわる交流活動の意義へとつながると考えられる。

認識・比較の質問においては、第1・第2を通して、交流することによって知った小学生の姿、自分との違いを見つけることができた。小学生は、幼児が次に所属する社会集団であり、重要な存在である。しかしながら、幼児にとって、小学生は赤ちゃんや大人などの他の成長段階と比較して、どのような人達であるかがわかりにくい存在である(濱田・杉村, 2008)。幼小交流活動を通して、それまで知らなかった小学生について知ること、卒園後の自分の姿を捉えることにもつながると考えられる。小学生を知ることによって、小学生だけではなく自分についての理解も深めることができるのではなからうか。

選択・憧れの質問において、幼児が小学生に憧れを抱いていることも示唆された。幼児にとって、自分の時間軸で将来を想像することは困難である。しかし、年長者とふれあうことにより、成長観や将来展望の育みへとつながったと考えられる。

本調査の結果から、幼児は幼小交流活動の内容よりも、小学生そのものに強いインパクトを受けていることが示された。また、小学生への憧れが、交流活動を通してより一層明確なものとなることが示された。したがって、幼小交流活動は、幼児にとって憧れの対象である小学生にふれることができる嬉しい体験、また、その憧れをより深める体験であると考えられる。ただ、「楽しい」という感覚は意識せずとも感じるものであるが、幼児が自ら小学生や自分の姿を振り返ることは難しく、教師の手助けが必要となる。交流活動における事後活動によって、幼児にとっての幼小交流活動体験は現在の自分や成長への見通しをもつ契機ともなりうるであらう。

## 引用文献

- 濱田祥子・杉村伸一郎 (2010). 幼児における人間の成長段階についての認識 幼年教育研究年報, 32, 125-132.
- 林 浩子 (2007). 幼小の交流活動から見えてくるもの—幼小連携におけるもう一つの意味— 保育学研究, 45 (2), 87-94.
- 庄司裕志・野田敦敬 (2009). 幼小連携の取り組みについての一考察 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 12, 221-228.

- 住野好久 (2006). 幼小連携における「交流活動」の意義と実践課題 岡山大学教育実践総合センター紀要, **6**, 101-110.
- 丹羽さかの・酒井朗・藤江康彦 (2005). 幼稚園・小学校の連携についての全国調査報告 幼児教育と小学校教育をつなぐ：幼小連携の現状と課題, お茶の水女子大学子ども発達教育センター, 23-34.
- 上野ひろ美 (2007). 保幼小の連携の課題に関する考察 奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要, **16**, 109 -122.
- Zazzo, B (1969). Le dynamisme evolutif l'enfant. In R.Zazzo. (Ed.) *Des Garçons de 6 a 12 ans*. Paris : Presses Universitaires de France. (久保田正人・塚野州一訳 (1974). 発達の力動過程 学童の成長と発達, 明治図書.)

### 謝 辞

調査にご協力いただきました, A幼稚園の園長先生を始めとする先生方に御礼を申し上げます。そして, たくさんお話をしてくれたA幼稚園の幼児の皆さん, ありがとうございます。

また, 執筆にあたって貴重なご意見を下さった広島大学幼年教育研究施設の杉村伸一郎先生にも御礼申し上げます。